

私の履歴書

釜本 邦茂

⑨

「た」と大喜びし、雨の駒沢で長沼健監督と選手たちは抱き合って男泣きした。

1964年東京五輪のサッカー競技は10月11日から23日まで東京の国立競技場、駒沢、秩父宮ラグビー場、横浜の三ツ沢、埼玉の大宮の5会場で行われた。率直に言って東京五輪に良い思い出はない。選手村で陸上短距離のヘイズ(米国)やマラソンのアルゼンチン(エチオピア)を見て、興奮しているうちに終わった感じなのだ。試合で役に立てなかった悔しさが苦さを倍にくれる。

東京五輪、活躍できず

「得点王を越える」心に誓う

日本は1次リーグD組でアルゼンチン、ガーナ、イタリアと同じだった。が、メンバーにプロのマツォーラやファケッティがいたイタリアは棄権を余儀なくされた。今の

は1勝1敗の2位でクリアし準々決勝に進んだ。初戦でアルゼンチンに3-2で逆転勝ちしたのが大きかった。先行アシストしたくらい。パスの出し手の八重樫茂生さんや宮本輝紀さんに「ガマ、走れ」といわれ、うろうろと動いていただけ。初めての五輪に浮足立って「自ら切り開く」という積極性に欠けていた。

2-3で負けた次のガーナ戦も準々決勝のチェコ戦も不発に終わった。大会中のゴールは関西のファンにも五輪サッカーを見てもうために企画された、負けチームを集めたトーナメントでのもの。大阪の長居でユーゴスラビアから1点を取ったが、後に日本代表監督になるイビチャ・オシムさんに2点を入れられ、1-6で負けた。まさに上には上がある構図。「ストライカー失格」のフラストレーションが胸奥に横たわった。八重樫さんや主将の平木隆三さんに「親善試合とタイトルマッチはものすごく違うね」と言ったら「当たり前



東京五輪アルゼンチン戦で逆転勝ち。中央が筆者。その右が川淵三郎さん＝駒沢陸上競技場で

ベネは2年後のワールドカップ(W杯)イングランド大会でも4点を取ってベスト8の立役者になっている。

「ベネを越える選手になる」と誓った私が、もう一人、励みにしたのが杉山さんだった。アルゼンチンのDFをきりきり舞いさせた杉山さんには同国のチーム役員の賛辞から「20万ドルの脚」という形容詞がつくようになった。置いてけぼりになるわけにはいかなかった。(日本サッカー協会顧問)

や。サッカーは戦争なんだ。きれいごとだけでやれるか」と返された。このままではダメとなった時、頭に浮かんだのが金メダルを獲得したハングリーのベネ。44年12月生まれで日本風に言えば私と同学年なのに、5試合12点で東京五輪得点王になった。